

第2章・場面1 再起の呼び声

空調の効いたオフィスにいても、ニュースが映し出す世界は熱に溶けていた。

「ニューデリー、日中最高気温五十五度を記録」

「アマゾン流域で酸素濃度の低下が観測され——」

私は見飽きた悲報の画面を消した。耳を塞ぎたいわけではない。ただ、これ以上現実を突きつけられるのに耐えられなかった。

眼の奥に焼き付いている光景がある。十年前——。有人火星探査機〈レゾリュート〉は打ち上げに成功したが、地球スイングバイの開始直後に閃光が走った。機体は巨大な火球に包まれて爆発、無数の破片となって四散した。その探査プロジェクトの統括責任者が私、グラハム・テイラーだった。幸運にも宇宙飛行士たちは緊急脱出に成功したが、救出活動は困難を極め、世界中が非難の声を上げた。私はその矢面に立たされ、無能と断じられた。

以来、私は最前線から外され、基礎研究部門で退屈な日々を過ごしている。もう、紙の上で未来を空想することしか許されていないのだ。

ノックもなくドアが開いた。入ってきたのは、NASA長官のソニア・ラミレスだった。五十代半ばの黒人女性。火星探査プロジェクトの頃から私をよく知る数少ない人物だ。背筋を伸ばし、冷静な眼差しでこちらを見ている。

「グラハム、あなたにしかできない仕事がある」

「.....もう、そういう言葉は聞きたくない」

私は椅子に沈み込み、天井を仰いだ。

「政治は、私を使い潰した。失敗の責任を押し付け、切り捨てた。もうごめんだ」

だが、ソニアは怯まなかった。

「状況が違う。今度は地球そのものの存続がかかっている。モアブ人と名乗る存在からのメッセージは本物よ。彼らは“ジッテ”と呼ばれる衛星に來いと言っている。あなたも報道は見たでしょう？」

「もちろん見たさ。けれど、そんなおとぎ話に賭けるのか？」

ソニアは私の机に端末を置いた。画面には、日本の研究者たちが必死に未知の辞書を解読している様子が映し出された。

「彼女は飯塚さくら。JAXA所属の情報工学者よ。彼女たちがモアブ人のメッセージを

翻訳した。メッセージの添付資料には、核融合推進エンジンの設計図と、ジッテへの航路も含まれていたわ」

私は思わず画面を凝視した。研究者の瞳に宿るあの光。十年前、私自身が持っていたものと同じだ。

「地球はもう待てない。温暖化は臨界を越えつつある。ジッテまで行く船を造れる人材は限られているわ。このプロジェクトを動かせるのはあなただけよ」

ソニアの声は冷静だが力強かった。

私は唇をかみしめた。胸に、子どもの頃から抱いていた宇宙への想いが一瞬浮かんできた。だが同時に、十年前の惨劇の記憶も鋭く蘇る。あの閃光と爆炎、責任を問われた日々——。喉まで出かかった言葉を、どうしても飲み込んでしまう。

私の逡巡を見て、ソニアは長く息を吐き、静かにうなずいた。

「.....わかったわ。答えは急がない。数日後に、日本の研究者たちと会ってみなさい。きっと考えるきっかけになるわ」

それだけ言い残し、彼女は部屋を去った。

数日後、私は飯塚さくらたちと対面した。ワシントン郊外の研究施設。青白いくまを浮かべながら会議室に現れた彼女だが、その瞳と声は澄んでいた。

「私たちの翻訳は完璧じゃありません。でも、確かに“救う方法がある”と伝えてきています。ここで立ち止まるわけにはいきません」

私は返す言葉を失った。彼女の瞳に恐怖は感じられない。不安よりも希望で満ちていた。十年前の私も、迷わずそう言えたはずだ。

その夜、寝室でひとり天井を見つめる。静まり返った闇の中で、幼い日の記憶が蘇ってきた。

——七歳の頃、父に手を引かれて見に行った流星群。

街の灯が届かない高台で、毛布にくるまり、夜空を待った。父が語る宇宙の果て、宇宙のスケールに心が踊った。やがて空を横切る無数の光が眼に焼きついていく。いつか地球を出て、もっと星のきらめきを見たい。その夢が、私をNASAへと導いたのだ。

あの夜に芽生えた宇宙と科学への憧れや愛着が、今の自分を形作っている。もう一度、宇宙に一步踏み出せるチャンスが目の前に来ている——

翌朝、机の引き出しから「ハンドリンク」と呼ばれる黒い板状の通信端末を取り出した。耳にかざして使う、音声通話だけが可能なデバイスだ。普段は滅多に使わない。私は深呼吸し、ソニアの端末に接続した。短い呼び出し音の後、彼女が短く応答す

る。私の一声を待っているのだ。

「.....私に、まだやれることがあるのなら、やらせてほしい」

ソニアが穏やかに微笑んだように感じた。

「待っていたわ、グラハム。人類の未来は、あなたの肩にかかっている」

通話が切れると、鉛のように重かった胸の奥が、少し軽くなった気がした。

もう逃げない。今度こそ。